
都市伝説の起源

ん？ん？ん？ん！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

都市伝説の起源

【Nコード】

N6417H

【作者名】

ん？ん？ん？ん！！

【あらすじ】

あらすじ、コメント等：私の所属するホラーサークルでは、私を含め、6人みんなが怖い話に飢えていた。もう、怖い話を聞きすぎて、どんな話を聞いても、全然怖くなくなってしまった。聞いた事のあるような話ばかりだからだ。そんな私たちが次に目をつけたのが都市伝説だった。今までも、怖い都市伝説なんかを読んだ事があったが、部長の一言で、私たちは、都市伝説の起源を探す事になった。

1 ホラーサークル開始前

この話は、作り話です。
だから、絶対に信じないで下さい。

私は、少し憂鬱な気分を抱えたまま、部室のドアをがらりと開いた。

「遅いぞ！！片桐君！！」かたぎり

ドアを開けた私を待ち受けていたのは、部長の怒声だった。

仕方ないじゃない。
日直だったんだから。

すでに沈み気味だった気分は、堂間部長どうまのその一言で、さらに沈んだ。

しかし私は、そんな気分を悟られないよう、気をつけながら返事する。

部長の機嫌を、らに損ねても、いい事はないし。
「すみません、部長」

謝りながら、横目でちらりと時計を見る。

4時23分。

何よ、別に遅れてないじゃない。

確か集合は、4時30分だった筈だ。

そんな不満が顔に出てしまったのか、部長が私に言う。

「君はここでは一番新人だろ？30分前に来るぐらいじゃないと困るよ」

放課後のチャイムが鳴った瞬間に、この場所にワープしろとでも？随分な言い草だった。

「すみません、次からは気をつけます」

しかし私は、殊勝にもそう言った。

「ふん、まあいい。これで全員……じゃないな。齊藤君、霊斗はどうした。君は同じクラスだろう？何で一緒に来なかったんだ」

部長に話を振られて、斉藤先輩は、読んでいた本から顔を上げた。綺麗な長い黒髪が、ふわりとなびく。

いつも思うのだが、どんなシャンプーを使えば、あんなに綺麗な髪を維持出来るのだろう。

それとも、乾かし方に何か秘密があるのだろうか。

是非聞いてみたい。……といつも思うのだが、斉藤先輩は、人を寄せ付けないオーラのようなものを放っている。気がする。

要するに、声を掛けづらい。

しかしいつまでもそう言って逃げている訳にもいかない。この部に入ってもう2ヶ月。そろそろいい頃合だろう。

今日のミーティングが終わったら、思い切って話しかけてみようかな。

「……………え、何ですか？部長？」

どうやら、斉藤先輩は話を聞いてなかったようだ。

それどころかあの様子だと、私が部屋に入って来た事にさえ、気付いて無かったのではないだろうか。

「………………。霊斗君はどうした、と言ったんだ」

部長は一瞬、怒ろつかどうか考えたようだった。

しかしすぐに無駄と判断したようで、質問を繰り返した。

「霊斗なら、図書館に寄って来るって。調べたい事があるらしいわよ」

それだけ答えると、斉藤先輩は再び本へと視線を落とした。
そんなに面白い本なのだろうか。

「……………今日でなくてもいいだろうに。仕方がない、彼抜きで始めよう、準備してくれ、坂本^{さかもと}」

「まあまあ、落ち着けて、堂間。それにまだ——」
時計を確認する坂本副部長。

「——時間も来てないみたいだし。やっぱりこーいうのは、全員揃ってやった方がいいと思うぜ、な？」

坂本先輩はやっぱ頼りになるなあ。

怒りっぽい堂間部長や、斉藤先輩、それにまだ来ていないが、無口な霊斗先輩を、上手く纏めている。もちろん言える訳もないが、堂間先輩より、坂本先輩の方が、よっぽど部長に向いていると、私は思っている。この部に入って、緊張でガチガチになっていた私に、

一番始めに話しかけてくれたのも坂本先輩だった。

「……………それもそうだな」

そう言って、堂間部長は、どしんと椅子に腰を下ろした。

坂本先輩も、やれやれといった様子で椅子に座る。

それを見て、タイミングを逃して立ちっぱなしだった私も、椅子を引く。

「ね、美穂^{みほ}。調べてきた？都市伝説」

私が着席すると、香織^{かおり}が、話しかけてきた。

この部の唯一の同級生である香織。

部に入るまでは、ほとんど話した事もなかったが、今では親友とも言える仲だ。

靈感が強いらしく、私と話していても、時々変な方を見ていたりする。

「……………ん、一応」

私は、いまいち冴えない返事を返す。

「どうしたの、美穂。何だか元気ないみたいだけど。もしかして、調べるの忘れてきちゃったの？」

「いや、調べるのは調べただけだね」

そう、調べるのは調べたのだ。

「ならなんでそんな元気ないの？」

「んー何かね、今回都市伝説を調べる事になったのって、新しい怖い話が欲しかったからでしょ？」

「そうだね、部長が「もう俺は全ての怪談を見た！！何か新しい話は無いのか！！」ってわめきだして」

「ちょ、香織、わめきだすって、……………部長に聞こえたらどうするのよ」

「でも本当にそうだったじゃない」

「それはそうだけど……………」

「で、それに対して、副部長が「なら、都市伝説を調べてみるかって言っただのよね」

「そうなのだ。それで、私も仕方なく調べてみた。調べてみたのだが。ねえ、都市伝説と怖い話って、ほとんど一緒じゃない？」

「……………うーん、それは私も思ったのよね。怖い話」都市伝説みたいな感じはする」

よかった。私だけが疑問を抱いていた訳ではないのだ。

と、その時部室のドアが開いて、霊斗先輩が入って来た。時計を見ると、4時30分ちょうどだった。

2 。。したら死ぬ

「よし、じゃあ、調べてきた資料を提出してくれ。口頭で発表するのでもいいぞ」

全員そろった所で、部長が部屋全体を見回しながら、会議の開始を宣言するように言った。

そんなもの何処吹く風で、斉藤先輩は本を読み続けている。

「おい！！斉藤！！お前いい加減に——」

当然の事ながら、部長の怒りが爆発する。

「まあまあ、おい、斉藤？部活始まったぞ」

「……え？あ、そうだったんだ」

斉藤先輩は、坂本副部長に軽く肩を揺すられ、ようやく本の世界から帰ってきた。

「そうだったってお前——」

「じゃあ俺から発表しよう」

部長を遮るように、坂本先輩が発表を始めた。

長年の付き合いなのか、そのあしらい方に、慣れたものを感じる。

「みんなも調べていて思ったと思うが、都市伝説というのは、怖い話と大半が被っている」

やはり私たちの会話は聞こえていたのだろうか。
隣りで香織も、気まずそうな顔をしている。

「それは何故か。何故だと思っ？香織さん」

「え、わ、私ですか?? うーん、そうだなあ。うーん……………ちょっと分かりません。あ、でも、都市伝説っていう割りに、結構田舎の話もあるなあと思いました」

急に話を振られててんばったのか、質問されたのとは明らかに違う答えを返す香織。

私に聞かれなくてよかった。今のタイミングで聞かれると、私も上手く答えていた自信がない。

そのとんちんかんな香織の発言を聞いて、部長がこれ見よがしに咳払いをして言った。

「香織君。君は本当に調べて来たのか!？」

「えー、ちゃんと調べてきましたよー!!」

「ならそんな馬鹿な発言はしないはずなんだがな!!」
今日の部長は、いつも以上にイライラしているようだ。

「なんですかそれー!! 大体私は昨日部活で疲れてたんですよ。調べて来た事に感謝されこそすれ、文句を言われる筋合いは無いと思うんですけど!!」

香織は、ほぼ毎日この部活に顔を出している。出しているから、時々忘れそうになるのだが、香織はテニス部にも入っているのだ。

「それは言い訳にならないと、入部する時に言っただろう!! 君はこちらの部活もおろそかにしないと約束したじゃないか!!」

「はいはいすみませんでしたー」

「お前先輩に向かって——」

「まあまあ！あのね、香織さん、都市で発生するうわさだから、都市伝説という訳ではないんだよ」

部長を押さえ込みながら、坂本先輩は言う。

急に話を振った事を、少なからず申し訳なく思っているようだ。

というか、そうだったのか。昨日一応調べて来たつもりだったけど、そんな事は知らなかった。

「えーと、僕もあまり詳しくは覚えてないんだけど、「都市伝説」の「都市」は、場所を指すんじゃないくて、「都市化した」っていう意味なんだよ」

「へえ、そうなの」

どうやら斉藤先輩も知らなかったらしい。

斉藤、お前もか。と呟きながら、部長が坂本先輩の言葉を引き継ぐ。
「そもそも、「都市伝説」という言葉自体、出来たのは最近なんだ。えーと、何とかという人が書いた本、なんだったかな……」

何とか言う人が書いた本って、結局何も分からないのと同じじゃないの。

見栄を張りたいらしく、作者名を思い出そうとしている部長。正直、そんなのどうでもいいんだけどなあ。

失礼だとは思うけど、坂本先輩の話の続きの方が聞きたい。

「エドワード・モランの「オルレアンのうわさ」だ」

低い声で、短くそう言ったのは、霊斗先輩だった。おそらく、今日この部屋に来てから、初めて喋ったんじゃないだろうか。

霊斗先輩は、無口だけど、適当な事は一切言わないから、少なくとも部長よりは、私の中で好印象だ。といっても、斉藤先輩と同じで、まだほとんど話した事はないのだけれど。

「そう、その作品の中で、始めて出てきた言葉なんだよ」

霊斗先輩の援護を受けて、ようやく言い切った部長。

……いかにも凄いだろ俺、みたいな顔してるけど、部長は全然凄くない。それに、今の話の流れでいくと絶対必要な情報を、まだ言っていない。ま、私は怖くて指摘できないのだけれど。

「ねえ、それでその本は、いつ発売されたの？」

どうやら、私と同じ疑問を、斉藤先輩も抱いていてくれたらしい。そうなのだ、まさしくそこが分からないと意味が無い。

予想通り、というべきか、部長はえーと、と考え込んでしまった。

「1969年だ。原題は「La Rumeur d'Orléans」だった筈だ」

またしても霊斗先輩が助け舟を出す。

それにしても、何でこの人はこんな事を覚えているんだろう。

「そういう事だ」

自信満々に言う部長。それに対して、私、香織、斉藤先輩の女性陣は冷めた視線を送った。

「話がすっかりそれてしまったけど、僕が調べて来たのは、その割と最近出来た都市伝説の中でもさらに新しい、「ネットロア」についてだよ」

「ネットロア………ですか？」

またしても私の知らない単語だった。昨日調べて来たのは、本当に上辺だけだったんだなあ……と、少し反省する。

ふと横を見ると、香織が「バカ」と口パクで言ってきた。
何でそんな事言われるんだろう。まさか香織は知っていたんだろうか。

……………あ。しまった。そういう事か。今度は私が部長に責められてしまう。

「ネットロアというのはね——」
部長が何か言おうとするが、それよりも早く、坂本先輩が説明を始める。

ありがとうございます、坂本先輩。

「——ネット上で広まった都市伝説の事だよ。最近は、インターネットが普及してきただろ？だから、従来以上の速度と規模で都市伝説が広まるようになったんだ」

「現代版都市伝説って事ですかー？」
香織が質問する。

「うーん、さっきの話で有ったように、都市伝説という言葉自体そんなに歴史が古くないから、厳密に言くと語弊があるけど、まあそういう事だよ」

「それで、具体的にはどんな事を調べて来たの？」
斉藤先輩が先を促す。

「【見たら呪われるホームページ】だよ」

「えー！見たんですか！？」
香織が大げさに驚く。もちろん私も驚いたが、香織の方が反応が早かった。

「いや、残念ながら見つける事はできなかった。というか、本当にあるかどうか分からないんだ」

「……見たら呪われる画像とかは聞いた事があるが、サイトとは初耳だな」

少し意外だが、部長も聞いた事がなかったらしい。

「実は、前から都市伝説には興味があつたから、ちよくちよく調べてたんだ。呪いの画像は一通り見たよ。むしろ僕としては、今まで堂間が都市伝説に興味を示さなかった事の方が意外だったけどな」

「……そんな画像を見て大丈夫なの？」
斉藤先輩が、心配そうに言う。

「もちろんだよ。見たら死ぬ画像なんてもし本当にあつたら、世界中に死亡者が溢れてしまうよ」

「んー、まあ、それもそうね」

斉藤先輩は、完全に納得した訳では無さそうだが、そこで引き下がった。

「何々したら死ぬ、という都市伝説で一番有名なのは、おそらく【ムラサキノカガミ】だね」

「あ、それ私も知ってる。20歳まで覚えてたら死ぬんだよね」
香織が反応する。もちろん私も知っていた。

「そう、それだよ。僕は試しに二十歳まで覚えていてみようと思ってるんだけど。困ったことに、もし僕が二十歳で死んだとしても、

それが原因で死んだ事は証明できないんだよね」

少しだけ気まずい空気になった。

直接的な生きる死ぬという話は、こんな部に入っている、少々重
いらしい。

「……………よし、次は香織君、君が報告してくれ」

重い空気を破ったのは、堂間部長だった。

私は、少しだけ、ほんの少しだけ、部長の事を見直した。

3 都市伝説カルタ

「私はあんまり調べられなかったんですけど、代わりにこんなものを持ってきました」

じゃーん、と言いながら、机の上に何かを置く香織。それが机の上に出た瞬間、霊斗先輩が、びく、と反応した。どうしたんだろう。

気にはなつたが、それより今は目の前のものが何か、だ。何だろう、ランプ、かな？

…… 本人に聞くのが一番いいだろう。

「ねえ香織。これ、何？」

「【都市伝説カルタ】だよ」

カルタらしい。

それも都市伝説の。

都市伝説って、そんなに種類があるのかな。「ん」とかどうするんだろう。

ま、見てみれば分かるか。よく見れば包装がしてある。香織もまだ開けてないらしい。

「開けてみてよ、香織。」

「そうだね。」

カルタを手に取りうとした香織の手を、誰かの手が横から掴んだ。

「ど、どうしたんですか、霊斗先輩！！」

阻んだのは、霊斗先輩だった。

香織が驚いて手を引っ込める。霊斗先輩も手を離れた。

「そのカルタ、誰からもらった？」

霊斗先輩が、焦ったように言う。

さつきから、どうしたのだろう。様子がおかしい。

「もらったんじゃないですよ、買ったんです」

「どっちでもいい、誰から買ったんだ？」

「誰って……そんなの分かりませんけど、帰り道に露天商がいたんで、珍しいなーと思って覗いてたら、これがあったから。だから、ちよーどいいと思って買ったんです」

「駄目だ。それを開けちゃ駄目だ！！」

「おい！！ちよつと落ちつけ霊斗！！どうしたんだ！！お前らしくも無い！！」

堂間部長が慌てて止める。本当にどうしたというのだろう。

「もー、大丈夫ですつて。こう見えても私靈感強いんですよ？このカルタからは、特に何も感じないし、大丈夫です、つて」

「あ、ちよつと」

霊斗先輩があんなに必死になっていたのがどうしても気になって、私は香織を止めようとした。

が、それよりも早く香織は包装を解き、カルタを取り出した。

思わず身構えるが、やはり何も起こらない。

爆弾でも仕掛けられているのでは、と思ったが、勘繰り過ぎだったみたいだ。

きつと霊斗先輩の勘違いか何かだろう。

霊斗先輩は、それを確認すると、それまで部長の腕を振り解こうと
していたのが嘘のように、途端に大人しくなった。

……諦めたようなその表情が、やっぱりちょっとだけ気になった。

「あれ！！何よコレ！！不良品じゃない！！」

カルタを取り出し、開いて確認していた香織が、素っ頓狂な声を出
した。

「ん、どうしたの？香織さん」

と、坂本先輩が聞く。

「あ、坂本先輩、ちょっと見て下さいよコレ！！」

「どれどれ、あーこれは酷いね」

「ですよー」

「どうしたんだ？」

もう安全と判断したのだろう。霊斗君を放すと、部長が二人に近付
いた。

「見て下さい、コレ。読み札を入れ忘れてるんです！！」

私も部長の後ろから覗き込んでみる。

確かにそこには、おどろおどろしい絵札しか入っていなかった。

4 堂間と坂本の選択

香織の提案で、神経衰弱のように全ての札を裏向きに並べ、その中から一枚を選び、そこに書かれている都市伝説について各自再調査してくる事になった。

香織は、カルタをとにかく使いたくて、というか使わないと気がすまないみたいで、適当に言ったようだった。例え適当に言ったんだとしても、その提案は、なかなか良い提案に思えた。

私は密かに霊斗先輩の反応が心配だった。しかし、無事参加する事になった。

その諦めたような顔が、やはり気にはなったが。

「じゃ、部長として、ここは俺から引くぞ」

部長として、とか言っているが、きっと自分が一番に引きたいだけなんだろう、堂間部長は。

しばらく手をうつろさせていたが、やがて一枚を捲った。

「これは……【口裂け女】、だな。」

誰が見てもそうだ。耳まで裂けた口の、悲しそうな表情の女が書かれている。

私は、マスクをつけていない事に、少し違和感を覚えた。

……でもこれはカルタなのだ。マスクで隠してしまうと分かりにくくなる。そういうものなのだろう。

というかさすが部長。こんなメジャーどころを引いてくるなんて。ある意味空気が読めている。

「つまらん、もう一回引くぞー!!」
怒り気味に、そう言う部長。

「駄目ですよ部長!! ルールを破らないで下さい!!」
「そうですね、そんな事をしたら面白くなるじゃないですか」
私と香織が言つと、それでももう一度引くか迷ったようだ、しぶしぶそれについて調べる事を認めた。

「まあそう落ち込むなよ堂間。【口裂け女】だって、もう一回調べてみれば何か新しい発見があるかもしれないだろ?.....次は僕が引こう」

坂本先輩が一枚選び、捲る。

「何ですか? コレ?」
香織が聞く。聞かれた坂本先輩も、分からないようだ。
もちろん私も分からない。

書かれているのは血の海。隣りに岩が突き立っている。
そこに、一人の少年が立ち尽くしている。

「これは地獄.....かしら。」
斉藤先輩が言う。

「でも、「と」ですよ? このカルタ」
カルタの左上を指差しながら、私は言った。
一体なんだろうか、これは。

「おそらく、【トミノの地獄】だろう」
と、霊斗先輩が言った。
トミノの地獄? 何だろう、それは。

「知らないのか？」

意外そうに、霊斗先輩は、坂本先輩に聞いた。
坂本先輩なら知っていて当たり前だ、と言わんばかりに。

「知らないな」

「そうか、なら悪い事はいわない。これについて調べるのは止めておけ。危険すぎる」

「お前今日おかしいぞ？結局このカルタだって何にも無かったんだし、気にし過ぎだって」

「違う！！このカルタがどうかいう問題じゃない。【トミノの地獄】は本当にやばいから止めておけ！！……特にお前みたいな性格の奴にはな。悪い事は言わないからもう一度引き直せ！！」

凄じ剣幕の霊斗先輩に気圧され、カルタを戻そうとする坂本先輩。
私と香織も、何も言えないでいたが、それを止めたのは部長だった。

「駄目だ。一度引いたものは絶対だ！！例外は認めない！！部長命令だ！！」

さっき戻そうとした人間の発言とは思えない。

が、ともあれ、坂本先輩のカルタは【トミノの地獄】に決まった。

5 霊斗、香織、斉藤、そして私

部長の命令で、次は霊斗先輩が引く事になった。
何だか空気がぴりぴりして来ている。嫌な感じだ。

霊斗先輩は、あまり迷わずに一枚を選び、捲る。

「ひっ!!」

私は思わず悲鳴をもらしてしまった。

そこに書かれていたのは、つぶれた蛙の絵だった。おそらくヒキガエルだろう。

カルタの右上には、「ひ」と書かれている。

「【ひきこさん】、か。……………悪趣味なオマージュだ」
霊斗先輩が呟く。

「何ですか？それ」

「簡単に言えば、口裂け女の亜種だ」
短くそう言う霊斗先輩。

もつと色々聞こうかと思ったが、
「次は私が引く!!」

という香織の声が聞こえたので、私はそちらに目を向けた。

香織が捲ったカードには、【564219】と、それだけが書かれていた。右上には【こ】と書かれている。

「何これー!!意味分らないんだけど!!」

騒いでいる香織。

が、私には意味が分かってしまった。あれは、語呂合わせで「殺しに行く」だ。

昨日調べた中に有った。確かポケベルの話だ。

どうせ後から調べれば分かってしまうのだろうけど、それを私から伝える気には何故かならず、黙っていた。

「私はどちらでもいいけど、どっちから引く?」

斉藤先輩が聞いてくる。

「あ、どうぞ、先に引いてください」

先輩を立てるって訳じゃないけど、私は先を譲った。

「そう?じゃあ……」

斉藤先輩が選んだカードには、公衆電話と、男の子が書かれていた。男の子は、うつすらと透けているようにも見える。

この男の子が霊という事だろうか。

「これは何?霊斗」

斉藤先輩が、霊斗先輩に聞いた。今までの流れからして、それが一番早いと判断したのだろう。

「【さとるくん】だな」

「そう、ありがとう。後は自分で調べてみるわ。その方が面白いと思うし」

そう言って、斉藤先輩は、鞆の中にカードをしまいこんだ。

ついに、私の順番が回ってきた。
カルタを一枚選ぶだけなのだが、締めという事で、何故か少し緊張する。

私は、一枚を選んで捲った。

「【都市伝説の起源】？」

声に出して読んでも、やっぱり分からない。

どういう事なの？

そのカードには、白い背景に黒い文字で、ただそれだけが書かれていた。

右上に、「と」と書かれているかと思っただが、それさえ無い。
このカードはなんなのだろうか。

「トランプで言う、ババみたいなものじゃないの？」
と香織。

「あら、でも、カルタにそんな特殊な札あったかしら」
と斉藤先輩。

私は困って、霊斗先輩に聞くが、「分からない」とにべもなく返された。

「えっと、……………もう一回」

部長の目を見ながら、言ってみる。

「駄目だ！！……………ちょうどいい。さっき話した何とかいう本について、もっと詳しく調べて来い！！」

結局私は、【都市伝説の起源】というよく分からないカードになってしまった。

「お前たち！！！！何をしている！！！！」

私は飛び上がりそうな程びっくりした。

いや、実際に飛び上がったかもしれない。

勢いよく開いたドアを見ると、生活指導の大竹が仁王立ちしていた。

「何って、部活ですよ、先生」

部長が代表して答える。

時計を見るが、まだ5時くらいだ。怒られるような時間じゃない。

「生徒は全員帰れと、さっき放送しただろう！！」

そう言われ、部長が坂本先輩に目配せする。それを受けた坂本先輩が、放送を確認する。

「…………切れてるな」

坂本先輩の言葉に頷くと、部長は大竹に向かって答えた。

「すみません、放送が切れてたみたいです。今すぐ帰ります」

「そうしろ！！次に回ってくる時に残っていたら、停学だからな！！」

次の部屋の確認にいくのだろうか、部屋を出ようとする先生に、私は慌てて尋ねた。

「先生！！何で帰らなきゃならないんですか？」

「お前たちが知る必要はない!!」
にべもなくそう言つと、大竹はドアを閉めて行ってしまった。

6 ひきこさん（上）

帰り道、香織は寄る場所があると言って、どこかへ行ってしまったので、私は一人で歩いていた。

すると、電信柱の影に、霊斗先輩がいた。

正直私はびっくりしたが、すぐに気を取り直して、霊斗先輩に声を掛けてみる事にした。今日の事でちょっと聞きたい事もあるし。

「どうしたんですか？ 霊斗先輩？」

「な！！あ、ああ。片桐か。どうした？」

私が声を掛けると、驚いたように返事をした。ふざけているのかとも思ったが、霊斗先輩は本当に驚いたようだ。何でだろう。私が歩いているの、見えてた筈だけど。目を閉じていた訳でもないし。

「いえ、私こっちが帰り道なんです。それで、偶然霊斗先輩を見つけたから。」

「……そうか」

そう言って、私に声を掛ける前の体勢に戻ろうとする霊斗先輩。

「ちょっと待って下さい」

「何だ？ まだ何か用か？」

「……何で、あのカルタを開けるのに、あんなに反対したんですか？」

ずっと引つかかっていた事を聞いてみた。

「あれは………危ない」

またそれだ。危ない理由を教えてもらえないと、こっちも引き下がれない。

「何が危ないの？　どういう風に危ないんですか！？」

「……………来たか。おい片桐！！早く俺から離れろ！！」

「何がですか！！はぐらかさないで下さい！！」

「いいから！！死にたく無ければ早く離れろ！！……………くそ、わざわざ人気のない場所を選んだのに！！」

「じゃあせめてこれだけでも言っして下さい。何が来たんですか？」
そう聞く私を、突き飛ばしながら、霊斗先輩は答えた。

「【ひきこさん】だ」

7 ひきこさん(下)

「何するんですか!!」

と、立ち上がろうとする私の腕の力が抜けた。

何故だろう?上手く立ち上がる事が出来ない。

それどころか、体を動かす事が出来ない?

「……………ッ。……………っ!？」

何?なんなのコレは?

気が付けば私は、声を出す事さえ出来なくなっていた。

目を閉じる自由さえ奪われた私は、ただ前を見る事しか出来なくなっていた。

ゆらり、と。

曲がり角の向こうから、ぼろぼろの服を着た人間が現れた。

雰囲気からして、女性だと思っのだが、それもよく分からない。

ぽつぽつ、と雨が降ってきた。

天気予報では、今日は一日中晴れだった筈だ。

「久しぶりの洗濯日和ですね」と笑うレポーターの顔が、記憶に残っている。

雨が激しくなってきた。

それでも私は、目を閉じる事が出来ない。雨が目に入る。痛い、が、ぬぐう事ももちろん出来ない。

前を見る事が難しいほどの雨の中、ぼろぼろの服を着た人間は、な

お立ち尽くしている。

あれが、【ひきこさん】なのだろうか。と私はふと思った。

「いいか、絶対に動くなよ」

霊斗先輩が、そう言ってくる。動くなと言われても、もともと動けないのだ。

電信柱の影から、【ひきこさん】に対峙するように出て行く霊斗先輩。

止めようと、手を動かそうとするが、やはり動かす事が出来ない。何故霊斗先輩は、当然のように動いているのだろうか。

「私……………い……………」

雨でほとんど見えなくなってしまうているが、【ひきこさん】が顔を上げたのが見えた。

声を出す事が出来れば、私は叫んでいただろう。

伸ばしっぱなしの髪は、雨によって顔に張り付いている。

動いた拍子に、髪的位置がずれたからか、両手ともに何かを持っているのが見えた。

それよりも私が衝撃を受けたのが、その顔だ。痩せこけた顔の中で、目だけがぎょろりと際立っている。

本当にコレが人間なのだろうか？

一際目立つその目には、生気というものが感じられない。

この世の全てを恨んでいるような、この世の全てを壊さんとするような、澱んだ目をしていた。

嫌だ。

嫌だ。嫌だ。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。

この場所に、これ以上居たくない。一刻も速く、この場所を離れたい。そんな私の願いは叶わず、私の体は張り付いたようにその場に留まり続ける。

「私……い……か……？」

また【ひきこさん】が何かを言っている。

が、雨音にかき消されて、よく聞こえない。

「やれやれ、俺が小学生に見えるのかよ？悪い冗談だ」

霊斗先輩は、何を言っているのだろう？これだけ近い距離なのに、何と言っているのか聞こえない。

空が割れたかと思うほどに、雨が叩きつけて来ている。

[illegible]

雨音などものともしない大声で叫び、こちらへと走つて来る【ひき
つらん】。

嫌
!
!

来ないで!!
こっちへ来ないで!!

動かない筈の体が、がくがく震えているような気がする。

「大丈夫だ。奴が狙ってるのは俺だけだ」
そう言っつて、私をかばうように立つ霊斗先輩。

物凄い速さで、【ひきこさん】は近づいて来る。

「【引っ張るぞ】!!」

霊斗先輩がそう叫んだ瞬間、びっくりと、【ひきこさん】の体全体が躍動する。

「【引っ張るぞ】!!」

もう一度霊斗先輩が叫ぶ。また【ひきこさん】が体全体で反応する。怯んでいるのかもしれない。

「【引っ張】っ!!??」

再度叫ぼつとした霊斗先輩の足を、【ひきこさん】が強引に引く。
ぐちゃりと、何かが潰れたみたいな嫌な音がした。
豪快に転倒する霊斗先輩。

「っち!?!...なんて力だ」
そのまま霊斗先輩はずるずると引きずられていく。

駄目だ。

このまま行かせては駄目だ。
そんな気がした。

「……………よー!」

出ないはずの声を、私はどうにか絞り出した。

その瞬間、ありえない角度で、【ひきこさん】の顔がぐりんと私の方を向く。

引きずっていた霊斗先輩の足も離れたようだ。

もしかして、目標を、変更した……………の？

嫌。嫌。嫌。嫌。嫌。

やっぱり無理なんてしなければよかった。

霊斗先輩の事は嫌いではないけれど、自分の命の方が大事に決まっている。

何で私は、助けようなんて思ったんだろう。

馬鹿だ。

私は馬鹿だ。

じりじりと、先ほどまでの速さが嘘だったようにゆっくりと、【ひきこさん】は私に近づいて来る。

さっきは遠くて見えなかったが、その両手には、血まみれの包丁と、ぐちゃぐちゃに潰れたひきがえるがそれぞれあった。

「おいおい、見境い無しかよ。どう見たら片桐が小学生に見えるんだよ。……………仕方ない。この手は使いたくなかったんだが」

霊斗先輩が何かを言っているが、今はそれどころじゃない。
逃げなければ。速く逃げなければ。

「おい、よく聞け【ひきこさん】。あいつの名前は。。。だ!!」

よく聞こえない。よく聞こえなかったが、それは私の名前ではない。

しかし、霊斗先輩のその言葉を聞いたとたん、【ひきこさん】はぶるぶると震えだした。

「ちなみにな、俺の名前は――」

震える【ひきこさん】の肩をがしりと掴み、耳元に口を近づけると、
霊斗さんは、何かを囁いた。

[illegible]

【ひき
霊斗先輩が肩から手を外すと、錯乱したように叫びながら、
こさん】はどこかへ行ってしまった。

「……助かったの？」

雨が小降りになってきている。

安心した私は、全身から力が抜け、そのまま意識を失った。

目を覚ますと、自分の部屋だった。
あれ？私、どうやって帰って来たんだろう。

帰る途中で、霊斗先輩に合って、【ひきこさん】に襲われて、それで……

思い出ただけで私の体が、ぶるりと震えた。
夢だ。きつと夢だ。私は疲れてるんだ。

時計を見ると、2時15分だった。

……… やっぱり疲れてるのよ。記憶が無いなんておかしい。

そのまま寝ようとしたら、携帯が鳴った。

……… 誰よ、こんな時間に。

無視してそのまま寝ようとしたが、電話は一向に切れる気配がない。
いらいらした私は、誰からかかって来たかも確認せず、乱暴に電話を取った。

「はい、片桐ですけどー！」

「あ、美穂？よかった、やっと出た。本当によかったよー。」

「ちょ、どうしたのよ、香織。」

「怖かった。怖かったよー。」

「お、落ち着いて。ね？ほら、香織？どうしたの？落ち着いて、ゆ

つくりと話してみて？」

しばらく子供のように泣きじゃくっていたが、私が根気強く励まし続けると、香織は次第に冷静さを取り戻していった。

「……………昼間に部室でね、カルタを引いたでしょ？」

ぎくり、とした。

香織が引いたのは確か、【564219】だった。そして、霊斗先輩が引いたのは……………【ひきこさん】。

昼間の、あの出来事が嫌でもフラッシュバックする。違う。夢だ。あれは夢なのだ。

私は、無理して明るい声を出した。

「うん、引いたね！！私なんてよく分からないの引いちゃったから、何を調べていいか困っちゃってさ、あはは」

「……………ポケベルがね、あつたの」

香織のその一言で、私が無理に作ろうとした明るい空気は、雲散霧消した。

「……………え？」

「昔使ってたポケベルが、私ที่บ้านに帰ったら、ベッドの上に置いてあつたの」

嫌な汗が、背中を流れていくのを感じる。

「き、きつとあれよ。ほら。お母さんが部屋を掃除してる時に、偶然見つけたんじゃないの？それで——」

私の虚しい想像を、香織の声があっさり打ち砕く。

「違うつて！！私だつて、そう思つて一番に聞いたわ！！そしたら、そんなの知らないつて。嘘を言つてる様子も無かつた！！お父さんにも、おじいちゃんにも、おばあちゃんにも聞いたわ！！みんなみんな、全然知らないつて！！」

訴えかける声が、どんどん悲痛になっていく。

私は、聞いているのが辛くなって来ていた。

「……でも」

「それじゃないの!! そのポケベルに、【564219】って書いてあったのよ!!」

「落ち着いて、香織」

「調べたの、私。【5 6 4 2 1 9】ってどんな都市伝説なのか。そしたら。そしたら……!!」

香織は、また泣き出してしまった。

私は、どう返事すればいいか分からなかった。

7°

何の音だろう？

明らかに私の電話の着信音ではないのだが、つい癖で確認してしま
う。

【通話中】という表示の上の時間は、2時22分を指していた。

36

私は、
またしても気絶してしまった。

9 いつもと同じような日

「ちょっと美穂！―いつまで寝てるの！？早く起きなさい！！学校遅れるわよ！！」

階下から、母さんの声が聞こえる。

夢………なの？

もういやだ。

昨日から、変な事ばかり起こる。

階段を下りると、いつもの光景がそこにはあった。

「ねえ母さん、私、昨日の夜うなされてなかった？」

「何変な事言ってるのよ、ほら、遅れそうなんだから早く食べなさい」

「はい」

何気ない風を装って答えたものの、私はいつも通りの声を出せただろうか。

いつものように登校して、いつものように授業を受ける。

いつもと違うのは、美穂がいない事だ。

携帯に電話しても、「その番号は現在使われておりません」というアナウンスが響くばかりだ。

先生に、何故美穂が休んでいるのか聞いてみたら、そんな人いたかしら、と言われた。

クラスメイトに聞いてみても、そんな子いたっけ？と言われた。

あはは、おかしい。
みんな、私を騙そうと、必死になっちゃって。

放課後になった。

今日も私は、日直だった。

日直の仕事をして終えて時計を見ると、4時30分を過ぎてしまっていた。

いけない、早くいかないと。

部長にまた嫌味を言われてしまう。

部室に行って、部のみんなに美穂の事を聞かないと。
さすがに部員にまで手回しする事は出来ない筈だ。

私の足は、知らず知らずの内に、駆け足になっていた。

部室のドアを開く。

中には誰もいなかった。

「そん……………な。」

どれくらい経ったのだろう。呆然としていた私の肩を、生活指導の大竹が叩いた。

「何をしとるか！！部活に早くいけ！！帰宅部なら早く帰れ！！」

「先生、昨日、ここで先生に会いましたよね、私。」

「突然何を言い出すんだ！！くだらん事を言っとらんで、とっとと行け！！」

どこに行けというんだろう。
私の部屋はここなのに。

「……先生、【ホラーサークル】って知ってますか？部活として認められないから、仕方なく同好会として活動している。」

「そんなものは知らん!!」

「そんな!!この部屋で、私たちは活動していたんです!!」

「何を言つとる。この部屋は、5年前からずっと空き部屋だ!!」

「……………うそ、よ。」

「いいか、早く帰るんだぞ。」

付き合いきれん、といった様子で、大竹は行ってしまった。

10 都市伝説の起源

とほとほと、私は一人で帰り道を歩く。
いつもなら、隣りには美穂がいるのに。

「待ってたぞ」

ちょうど昨日、【ひきこさん】に遭遇した辺りで、霊斗先輩が声を掛けてきた。

「……………霊斗……………せん、ぱい」

「何をこの世の終わりみたいな顔をしているんだ。辛いのは分かるが、お前にはまだやる事がある」

「……………やる、こと?」

「しっかりしろ。俺を含めて、あのホラーサークルに所属していた人間は、存在が無かった事になっている。お前を除いてな」

「やっぱり!! やっぱりホラーサークルは合ったんですね!! 夢なんかじゃなかったんですね!! 夢なんかじゃ……………」

「気をしっかりもて。昨日お前が引いたカードは、【都市伝説の起源】だったよな」

「……………はい。」

「俺なりに考えてみたんだが、お前は、文字通り都市伝説の起源になる必要がある」

「どういつ事ですか？」

「……………その答えを、俺の口から言う事はできない」

「そんなー!!」

「が、可能な範囲でヒントは教えてやる。……………そのくらいなら、おそらく大丈夫だろう」

「……………大丈夫？」

「まあ聞け。怪異に巻き込まれて死んだ人間は、多くが存在ごと消える。まるで元からそんな人間いなかったかのように」

今日の出来事が思い返される。

教師の反応。クラスメイトの反応。それに、母親の反応。

「いま巷で都市伝説として囁かれてる噂が、どういつ風に始まるか知ってるか？」

それは、おととい調べたので知っている。

「確か、友達の友達に聞いた話なんだけど、です」

「そうだ。つまり、どんな話にも、生存者がいるという事だ。そうしないと、話自体が伝わらないからな」

「で、でも」

「部長が狙われたのは、【口裂け女】だが、何故部長が死んだか分

かるか？」

「……………きっと、回避手段を知らなかったんじゃない」

「さすがに【ポマード】くらい知ってるだろう。そうじゃない。怪異も進化してる。そういう事だ」

「よく、分かりません」

「分からなくても、お前はやらなくてはならない。選ばれたんだ。

……………俺はそろそろ行く。後は頼んだぞ」

ぽん、と私の肩に手をおくと、霊斗先輩は、私に背を向けて、歩き始めた。

「待つて！！行くつて、何処へ！？」

「さあな？俺はもう、本来存在しない人間だからな。この町にいると、色々ときしんでしまう」

霊斗先輩は、そう言っていると、今度は本当に行ってしまった。

私は、その日家に帰ると、小説を書く事にした。
それが、今書いているこれだ。

だから、だけど、この作品は、どうしようもなく創作物だ。

物語を締める前に、私はもう一度言っておこうと思う。

この話は、作り話です。

だから、絶対に信じないで下さい。

さて、そろそろ物語を終わろうと思う。

この事件を通して、私の価値観は、180度変わってしまった。
失ったものは大きくて、

得たものは……………。

得たものは、何かよく分からないけれど。

それでも私は、間違いなく、どうしようもないくらいに、【都市伝説カルタ】を扱ったこの話の、【都市伝説の起源】なのだ。

10 都市伝説の起源（後書き）

最後まで読んで下さって、ありがとうございます。

今回、ホラーという事で、都市伝説を扱ってみました。どうだったでしょうか。少しでも怖いと思って頂ければ幸いです。都市伝説というのは、作中でも触れているように、生存者がいなければ、そもそも話が生まれません。

本当にあるかもしれないというリアリティを保ちつつ、死ななかった理由を、それらしく作らなければならない。

その点に留意して、今回の作品は書かれています。

あとがきという事で、少し作品の補足的なものをしておくと、今回の話は、霊斗が露天商を追うようになったきっかけでもあります。正直、登場人物は六人もいらなかったのでは、と反省してます。最後の方、先輩がたは半分空気化していますし。

部長は、【口裂け女】から逃げ切れませんでした。

副部長は、【トミノの地獄】を音読してしまいました。

斉藤先輩は、【さとるくん】を呼んだ後、振り向いてしまいました。

本当は作中で、それぞれの都市伝説にも触れようと思っていたのですが、あまり長くなりすぎるのもどうかな、と思ったので、今回はこうしました。

最後に、感想を頂けると本当に本当に嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6417h/>

都市伝説の起源

2010年10月10日15時25分発行